

第7詩集「赤とんぼの群れに」より



川上 和弘
1973年 3月 徳島県で生まれる。
1982年 3月 国立療養所徳島病院に入院。



ようこそ(徳島病院入院当時)

空と雲

青い空

白い雲

いつもみてるけど
かわらない

空それに
雲

なぜかそこには
僕がとめる
自由がある

ふる里

山道を帰る時
小鳥の鳴き声
草や花

だれもわからない
よろこび
ふる里へ帰る
よろこび
いつもおちつかせる
ふる里の香り

またいつの日か
ふる里に帰るのを
僕は
心待ちにしている

僕の思い

今きみは一步一步ふみこんで
僕の方に近ようとしていっていったら
きみはおこるだろうか
だけどだれがきみと出会えるように
してくれたのだろうか
これはきつと神様だ
神様がきみをかわい子になるように
してくれたんだ

今君は一步一步ふみこんで
僕の方に近ようとしていっていったら
きみはおこるだろうか
だけど君と出会った時から
いつもどんな時でもきみは
僕の心の中にならずにいるんだ
だからきみに僕の愛がわかって
ほしいんだ

今は秋

今はもう秋
夏の濃く染まった
緑から
秋の切ない色に
染まる
落ち葉が落ちていく
なにか
思いつめてゆくように
落ち葉がひらひらと
今はやっぱり秋